綴葉（ていよう）

'18 7

No.369

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

萩尾望都著『私の少女マンガ講義』

マルクス・ガブリエル著、清水一浩訳『なぜ世界は存在しないのか』

特集／綴葉旅行社

新刊コーナー／新書コーナー／あれから半世紀／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net
綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

わたしだけの感情、わたしだけの少女マンガ

私の少女マンガ講義

萩尾望都著
新潮社

「少女マンガとは、少女の、少女による、少女のためのメディアなのだ」――一九七〇年代の少女マンガ界に革命を起こした「花の二四年組」の代表者、萩尾望都。本書は彼女の講演録と、『ポーの一族』の新作『春の夢』発表後のものも含むいくつかのインタビューから成る。彼女の話を聞いた編集者が漏らした言葉が、冒頭でひいた少女マンガテーゼとでも呼ぶべきものだ。さて、わたしたちも萩尾氏の言葉を追いかけながら、この言葉の内実を探るとしよう。

少女の手になる少女マンガ

まずは講演で語られた少女マンガ史をたどろう。五〇年代の少女マンガ家は男女半々ほどだったが、六〇年代になると一〇代でマンガ家デビューする少女たちが次々と現れる。ここに「日本の少女マンガの大きな特徴」である、少女みずから少女の夢を描くという構造が生まれる。七〇年代には萩尾望都をはじめ大島弓子や竹宮恵子など二四年組が登場し、精緻をきわめた内面描写で少女マンガの表現の幅を広げた。それと同時に読者「少女」の年齢も上がり、少女マンガは「読者とともに成長し、大人になっても読むことができる」ものになった。また同人活動をする作家が引き抜かれて商業誌デビューを飾る例も増えた。自分の好きなことを自由に表現する「少女」自身が少女マンガの世界を牽引する、という構図はいまも変わっていないのである。

ホモセクシュアリティを描く少女マンガ

奇妙に思われるかもしれないが、少女マンガの主人公は少女とは限らない。とくに二四年組の作品には男性どうしの恋愛を描いたものが多く、萩尾作品では『ポーの一族』のエドガーとアラン、『トーマの心臓』のトーマとユーリなど。なぜか。萩尾氏いわく、「もっとこの場にとらわれない、飛翔した気持ちを書きたいと思うと、なぜか男になってしまう」。書き手自身が「女性はこうあるべき」という制約を内面化していたため、少年になって初めて彼女たちの心は自由になった。いまは女性が女性として活躍するマンガを描ける時代になった、と語る萩尾氏の言葉には感慨深いものがある。

「心を解放する」少女マンガ

しかし、少女が担い少女に自由を与えてきたメディアであると同時に、萩尾作品は少女マンガテーゼを超えてゆく。萩尾望都の少女マンガは、少女だけのものではない。男女問わずファンがいる。たとえば先述の『トーマの心臓』は、愛するとは何かという普遍的な問題の核心に迫ることに成功している。少女としての現実を離れ自由に飛び回る感情は、ここで性差を超えたひとりの人間の問題にまで行きついたのだ。きっと、現にあるあり方だけが、本当のわたしなのではない。「現実の居心地が悪い」という感覚を原動力に生み出されつづける萩尾氏のマンガは、さまざまな人びとの感情を現実から解放し、自由にはばたく翼を与えてくれるはずだ。（ミセ）

（二二一頁　税込一六二〇円　3月刊）

世界は存在しないという矛盾

なぜ世界は存在しないのか

マルクス・ガブリエル著
清水一浩訳
講談社選書メチエ

本書のタイトルでもある「なぜ世界は存在しないのか」という問いを不思議に思うだろう。つまり、世界が存在しないにも関わらずなぜ我々は今ここに存在しているのかという疑問である。しかし、このような一見存在否定ともとれるような問いが存在を最も充実させるという矛盾が著者ガブリエルの見解なのである。それはなぜかが本書で丹念に、そして平易に説かれている。

世界＝存在するすべての領域がそのなかに現われてくる領域

では、そもそも世界とは何かを問う必要がある。著者によれば世界とは《存在するすべての領域がそのなかに現われてくる領域のこと》である。領域とは対象領域のことで、例えば著者が出す例として宇宙がある。日常的に我々は宇宙と世界とを明確に区別していないが、宇宙とは、物理学という領域によって定められた世界全体の一部にすぎない。宇宙に限らず他にも政治などの無数の領域があり、全体の一部である。世界はそれらをも含んだ全てであり、全てはそこで現われて存在するのである。

存在＝意味の場

著者は《存在すること＝何らかの意味の場に現象すること》と言う。先ほども言ったように、対象領域とはそれぞれの領域に在ることで、例えば分子は宇宙のなかに、また国民は国家に所属するということである。しかし、著者はここで存在ということが対象領域というよりも意味の場で在ると言う。対象領域とは、論理学の集合概念に代表されるように、可算的なもののみを表す。それに対し、意味の場はそれらが逃しているような様々な在り方までをも表すことができる。例えば、4という数字は、2＋2＝3＋1とも、全て単純に1を四回足していっても成立する。同じものでも様々な異なった仕方で表される。このように意味の場は、対象が現象する様々な仕方に対応している存在論なのである。

世界は存在しないゆえに満たされる存在

著者はこう総括する。《たったひとつの世界なるものなど存在せず、むしろ無限に数多くのもろもろの世界だけが存在している》。存在することは意味の場の現象であり、それは対象が様々な仕方で現象するということであった。しかし、世界は一切で、全体であり、他の現象と並び立つことはありえないのであった。ここで一切である世界と意味の場である存在に矛盾が生じるのだ。ゆえに一つの世界は存在せず、無数の世界だけが存在すると著者は断言する。例えば、京都大学を例にとろう。これに関しての実在は少なくとも四つある。①京都大学、②第三者の京大、③評者の（私の）京大、④読者の（あなたの）京大……。世界はたった一つではありえず、このように無数の世界があり、存在で満たされているのだ。

哲学の新しい可能性を知りたい方はご一読を。哲学を一からわかるという実感を得ることができるだろう。

（ういろう）

（三四四頁　税込一九九八円　1月刊）

ニッポンを解剖する！
京都図鑑

JTBパブリッシング

旅行に何を求めるかは人によって違うだろう。だが、恐らく「非日常感」は欠かせない要素である。見慣れない景色のところに行き、日頃と違った行動をすることは誰にとっても楽しい。しかし、それは遠くに出かけることを本質的には要求していない。観光客としての視点さえ入手できれば、隣近所でも旅行をすることが可能なのではないだろうか。殊、有名な観光地であるこの京都では。

見慣れた景色に新たな要素を発見するためには、それなりの準備が必要である。並みのガイドブックでは知っていることしか掲載されておらず、役に立たない。普段買い物袋片手に通るような場所なら、世界遺産であるとか古いといった情報には何の驚きもないはずだ。その点、京都の観光地や風物について非常に細かい見どころを紹介する本書は、この目的に最適な一冊である。例えば下鴨神社に行ったことはあるはずだが、糺の森の植生や生き物に注目した経験はあるだろうか。京都駅ビルを京都盆地のような構造だと認識したことはあるだろうか。あるいは、錦市場の天井の一部はステンドグラスになっており、その歴史が描かれていることをご存知だろうか。本書ではこうした小ネタ的な情報はもちろん、建築の様式や仏像の鑑賞法など、見慣れた景色を再発見するのに役立つ情報が多数収録されている。

よく見知った近所をガイドブック片手に周るのは、遠出に比べてそれほど印象的でないのは否めない。しかし、それでも十分に非日常として楽しめるはずだ。今夏は自転車で出かけてみてはいかがだろうか。　（**蕨餅**）

（160 頁　税込 1728 円）

〈特集〉

綴葉旅行社

ようこそ、いらっしゃいませ。こちら、綴葉旅行社でございます。……えっ、忙しくて旅行なんてする暇がない？　なあに、問題ありません。用意するのは、一冊の本とすこしの時間だけ。本を開けば、あなたはいつの間にかここではない場所の風に吹かれています。それでは、われわれ綴葉旅行社が用意したとっておきの旅をお楽しみください。（**ミセ**）

中国の世界遺産を旅する
響き合う歴史と文化
湯浅邦弘著　中公新書ラクレ

旅の醍醐味は、何らかの新しい発見である。世界遺産登録数第二位が示している通り、中国は観光名所大国である。その背景を学ぶことで、ただの観光名所だったものが特別な何かに変わるだろう。

本書は中国の世界遺産、殷墟や万里の長城など七つをピックアップして、その背景を描いた一冊。中国の古代思想を専門としている著者の知識は、情報が羅列されただけの観光ガイドブックとは一味違う感覚を味わえる。

そのなかで注目したいのが「兵馬俑」である。兵馬俑とは秦の始皇帝陵で共に埋められた兵士の等身大の銅像であり、約八千体が発見されている。驚くことに、その像はよく見てみると一体、一体の装飾品や髪の毛一本、一本に至るまでかなり精巧に作られており、当時は彩色まで施されているほど忠実に再現していた。後の時代にも兵馬俑は発見されているのだが、始皇帝陵のものと比較しても精巧とは程遠い人形のようなお粗末なものなのであった。このことから、始皇帝による法治主義がどれだけ徹底されていたのかがわかる。例えば、連帯責任制などに基づく信賞必罰的なものがあったことが確認されていて、職人たちはその制度に則って必死にやらざるを得なかった結果があの精巧さである。ここから徹底した統一国家が始皇帝の在任中に実現していたことがわかった。そうして始皇帝の世間一般の人物像は悪逆非道な王から偉大な帝王へと変わりつつあるようだ。

そうした背景知識を持って旅に出てみよう。そうすることで自分だけにしか気づかない新しい発見ができれば旅はもっと有意義なものとなるだろう。　　（**ういろう**）

（242 頁　税込 950 円）

山頭火句集
村上護編　小﨑侃画
ちくま文庫

あらかじめ断っておくなら、これは旅行などという優雅な物見遊山ではない。絆にまみれたどうしようもない人間が生きて死ぬために歩くしかない、という切実な旅である。

種田山頭火。大地主の長男として生まれ、早大に入学、ツルゲーネフの翻訳をするなどいわばインテリとして青年期を送ったこの自由律俳句の俳人は、しかし「大正十五年四月、解くすべもない惑ひを脊負うて、行乞流転の旅に出た」。最初に、かの〈*分け入つても分け入つても青い山*〉の句が詠まれた。爾来、托鉢修行しながら俳句をものすることがすなわち彼の人生となった。本書には、その真直な句と随筆の精髄が滋味のある版画とともに収められている。〈*法衣こんなにやぶれて草の実*〉〈*いま写します紅葉が散ります*〉

一木一草一花にいたるすべてと感応しながら、ときに酒を飲み女と談じた。〈*おもひでがそれからそれへ酒のこぼれて*〉〈*水をへだててをなごやの灯がまたたきだした*〉決して孤独な行脚ではなく、しばしば句友と会してもいた。〈*お月さまがお地蔵さまにお寒くなりました*〉といった可愛らしいユーモアものぞく。僧形の男は、〈*濁れる水の流れつつ澄む*〉ように、破戒の矛盾に満ちながらもその矛盾を生き抜いた。〈*やつぱり一人がよろしい雑草*〉〈*やつぱり一人はさみしい枯草*〉

この一冊を通してまざまざと浮かび上がるのは、「私は詩として私自身を表現しなければならない」と宣言した旅人の、時雨に煙るうしろ姿であろう。〈*けふもいちにち風をあるいてきた*〉その姿が妙にうつくしい憧れを誘うのは、どうしたことだろう。　　（**春海**）

（396 頁　税込 1080 円）

ルルド　巡礼者へのしおり

ロメオ･マジョーニ著
杉原寛信訳　サンパウロ

病を癒す、奇跡の泉。そんな聖地への巡礼の旅をご案内したい。1858 年、南仏のピレネー山中の小村ルルドで、14 歳の少女の前に聖母マリアが顕現した。少女の名はベルナデッタ。方言でしか話せず、読み書きもできない、貧窮家庭の娘であった。

他の者には視えないマリアを視ることのできるベルナデッタは評判になっていくが、あるとき、手で地面を掘り、泥水を飲むという「動物じみた奇行」をしてヒステリー患者としても扱われるようになってしまう。しかし、彼女はマリアの言葉に従っただけであり、その際に湧いた泉が、病を癒す、奇跡の泉として発展を遂げていくのだから聖性とは数奇なものである。

後に付近一帯は聖域として教会によって購入されるが、ベルナデッタ本人は追い出されるようにフランス中部にある修道院に入り、35 歳で病死する。

ルルドへの巡礼のポイントを信仰的立場から紹介する本書には、ミサの様子が説教の内容も含めて詳しく記され、十字架の道行やロザリオについても丁寧に掲載されている。しかし、説教者の雄弁よりも胸を打つのは、むしろベルナデッタが遺した素朴な言葉である。「母マリアよ、わたしが受けた侮辱、あざけり、恥辱に、そしてわたしを正気を失った者、いつわる者、下心のある者として扱った人びとに感謝します。わたしが読み書き出来なかったこと、弱い記憶力、無知、愚かさに感謝します。感謝、感謝。なぜなら世界でわたしより愚かで、頭の悪い子どもがいたなら、あなたはその子を選ばれたでしょうから……」。

（霊人）

（166 頁　税込 702 円）

ドイツ　町から町へ

池内紀著
中公新書

ドイツ文学者かつエッセイストである池内紀の紀行エッセイ。片手におさまる新書サイズでありながら、取り上げられる町はなんと八〇ちかい。それゆえひとつひとつの記述は短いが、そこにはその町固有の物語がつまっている。ドイツの町は個性豊かなのだ。

本書の魅力は、何より池内氏によって語られるエピソードであろう。たとえば、おとぎ話に出てくるようなノイシュヴァンシュタイン城。一九世紀にルートヴィヒ二世によって建築されたが、彼は中世へのあこがれが高じたあまり精神病だとみなされ、近くのシュルタンベルク湖畔の城に幽閉された。が、雨の降る夜に湖で死体となって発見される。謎の死である。池内氏はこのエピソードを、文学者らしくこのように結んでいる――「歴史は公平である。プロシアのヴィルヘルムやビスマルクは、味けない教科書に出てくるだけだが、悲劇的な死をとげた国王は夢にいろどられ、城とともにいまも美しく生きている」。

もちろん、このような有名な場所だけではない。町の中心の市庁舎。その前には定期市の広場。からくり仕掛けの時計。修復中の大聖堂、その尖塔から見た銀色のエルベ川。かつての鉱山町の名残。人びとの手で再建された、戦後生まれの旧市街。飲み屋の亭主の赤ら顔。どんな町にも、物語はある。

過去のものであれ現在のものであれ、その町の個性をつくる人びとの営みを池内氏は見逃さない。彼はとにかく町を「よく歩いた」。「歩行と思考が二人三脚をした」と氏が自負するこの旅の記録。ページをめくればそこはドイツの町だ。気ままにふらっと、散歩してみるのはいかが。

（ミセ）

（224 頁　税込 821 円）

グッド・フライト、グッド・ナイト
――パイロットが誘う最高の空旅
マーク・ヴァンホーナッカー著
岡本由香子訳　早川書房

CAが去り、シートベルト・サインが点灯すると、巨体が鈍い振動と共に動き始める。初めて飛行機に乗る衝撃は、多くの子どもたちを夢中にし、一部の子どもを恐怖症にしてしまう。大人になってもそのワクワクは変わらず旅の醍醐味だ。旅先の光景を思い浮かべる人、海外での新たなビジネスに期待する人、遠い故郷に思いをはせる人……。そして飛ぶことのとりことなった子どもが、世界をまたにかけるボーイング747のパイロットとなり、空の旅への賛歌をうたい上げたのが本書『**グッド・フライト、グッド・ナイト**』だ。

側面の窓から外を見ることしかできない僕たちにとって、フライトのたびパイロットの目にする光景は想像の中にしかない。なかなか終わらない夜や昼、寂寞の砂漠にともる一点の灯や、海を行く貨物船の集団を眼下にして、操縦席には、空の河を行きかう船同士で連絡を取り合う静かな会話が行われる。彼らがたどるのは、空の地図に記された、暗号のような標識だ。精密機器と大量の燃料をアルミの皮膚で覆った巨体が、今も世界中の空を行き交っている。

今日はロンドン、明日はシンガポール、その次はブダペストという生活を繰り返すパイロットは、自分の居所がわからなくなる「プレイス・ラグ」をしばしば味わうという。少しなってみたい気もするが、そんな時、著者はただ歩き、大地と「ホーム」の感触を確かめる。乗客にとっても、長旅の帰りの便は特別な感情を伴うもの。本書は、空を旅することの喜びとともに、〈どこへ飛んでも戻る場所があり、留まる場所があることのすばらしさ〉、それを僕たちに教えてくれる。（**トロ**）

（341頁　税込1944円）

世界の混沌を歩く ダークツーリスト
丸山ゴンザレス著
講談社

旅をする際には普通はガイドブックを見て、そこに載っている有名観光地や穴場と称される所を巡るのが一般的なやり方だろう。また時には観光コースを離れて地元の人の暮らしぶりを見ては自分の暮らしとの共通点を見出して親近感を覚えたりすることもあるかもしれない。しかし、決して行かないところがあるはずだ。例えば治安の悪い地域、スラムなどである。ガイドブックやツアーでは立ち入り禁止、あるいはタブーとなっている場所を専ら載せているのが本書である。

マリファナ売買を追いかけてジャマイカ・メキシコ・アメリカ旅行、ルーマニアのマンホール住民にフィリピンの銃工房。スラム街巡りに難民居住地区への取材。普通なら足を踏み入れられない所に著者は体当たりで乗り込んでいく。本文中で告白しているように一つ間違えば殺されるという恐怖と隣り合わせの中で、取材とはいえ伝手を頼りにひたすら立ち入り要注意の地域へと踏み込んでいく著者の姿勢には驚きを禁じ得ない。当然交渉が上手くいかず帰らなければならない場合もあり、それを悔しがる著者には思わず共感してしまいそうにもなる。

そこに暮らしている人の素顔はギャングだった。そんなことがわかってしまうからこその「ダーク」ツーリズム。その世界は我々の生きる世界とは表裏一体をなしているともいえる。ただし、取材を通じて明らかになるそのようないわゆる真っ当でない人々はそれでも彼らなりの人生を生きている。親近感は湧かなくともそこには敬意を表したいものだ。

実際に行ってはいけない所、だからこそ紙上で旅してみてはいかがだろうか。　（**ねこ**）

（330頁　税込1728円）

新刊コーナー

祇園祭
――その魅力のすべて
アリカ　新潮社編　新潮社

七月になると、誰と宵山に行こうかということで気もそぞろになって来るのは、京都の大学に通う身の業のようなものでしょう。とはいえ、祇園祭のさまざまな神事や行事はまる一か月つづきます。宵山でどうこうという不純なたのしみ方はひとまず脇に置いて、祭の由緒正しい歴史や美術、それに見どころをこの本できちんと勉強しませんか……？

なにしろ、文章より写真が多いオールカラーのきれいな本です。本番では遠くてなかなか見られない細部の意匠があざやかに切り取られています。そして、山と鉾、全三三基についての由来や懸装品――一六世紀ベルギー製の鯉山のタペストリーが有名ですね――が解説されているのはもちろんのこと、祭を誇り高く担う職人や氏子たちにスポットライトを当てた点に、本書の特色がありましょう。

巡行の日の夕刻、八坂神社の神輿を「ホイット、ホイット」と舁く勇壮な男たち（ちなみに山鉾は、この神輿渡御のために道を清めているのです）。神のよりしろとなる稚児の化粧を口伝の徒弟制度で受け継いできた「顔師」。釘を一本も使わずに鉾を建てる「作事方」。高名な画家の原画をもとに見事な綴織を仕立てた老舗の織物屋。まさに、数え切れぬ人々のたゆみなき努力、遙かなる星霜の物語が、祭を美しくしているのです。

そんな真夏が巡って来ました。うだるようにして千年の一齣になる幸せを皆で共有したい、そう素直に思う次第なのです。（春海）

（一七五頁　税込二二六〇円　6月刊）

極夜行
角幡唯介著
文藝春秋

二三・四度の地軸の傾き。それは地球上に昼と夜の境界線を無くした時空を生み出した。堕ちることのない太陽と過ごす白夜と、明けることのない暗闇が続く極夜。本書は、極寒の北極で、明けない夜を四ヶ月間旅した記録である。

人類の歴史の中で、極夜をあえて旅する者はいなかった。陽を失った世界では、人は一寸先の距離も掴めず、暗闇に身も心も飲まれてしまうからだ。本来避けるべき極夜への冒険を、角幡は五年の歳月をかけて準備していた。彼の冒険論の中核にある言葉は〝脱システム〟。想像力が及ばない状況、マニュアルが通じない世界に身を投じることで、人は自分たちが依存している世界の限界性を知る。それは文明に頼ることで手に入れた自由とは違う、身体を信じ風を読むことで生まれる自由の味わいだった。そのために角幡は終わらない北極の夜を、一匹の犬と歩き出した。

闇は深かった。夜は冷たかった。入念に練った計画は、暗闇の世界に落ちていった。絶望に膝を折りながら容赦のない自然の中で、彼は生きようとする意志を鍛えていく。

「風景が美しく見えるのは、私が単なる観光客としてこの場にいるからではなく、生きようとする一人の人間としてそこにいるからだった」。

そして続く、太陽との再会。産道を通して生まれた赤ん坊が初めて光を見た時のように、角幡は泣いていた。……冒険の神髄がそこにあった。

（きもの）

（三三三頁　税込一八九〇円　2月刊）

微妙におかしな日本語
ことばの結びつきの正解・不正解
神永暁著　草思社

言葉遣いは、何かと物議を醸すテーマである。ら抜き言葉、コンビニ敬語、などなど。しかし正誤の判断が最も難しいのは、本書で扱われるコロケーション（ことば同士の慣用的な結びつき）の問題である。

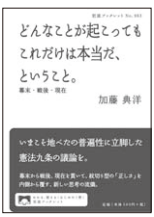
本書では、「怒り心頭に達する／発する」のような、約一五〇種の間違えやすいコロケーションの組み合わせが紹介されている。ここから「怒り心頭に発する」という「正しい」表現を知り、自らの言葉遣いを正すために本書を活用することもできる。しかし本書の最大の面白さは、むしろ「誤用」に対する著者の考察にあるのではないか。

古くから使われてきた本来の表現は、なるほど正しい表現ではある。しかし、例えば多くの類書で誤りとされてきた「物議を呼ぶ」という表現は、本当に誤用と言い切れるのか。なぜ「一抹の望み」とは言わないのか。なぜ「寸暇を惜しまず」という誤用が生まれたのか。著者は、コーパスでの使用例、言葉の意味、歴史的背景などから多面的に考察し、「誤用」の「微妙なおかしさ」加減を浮き彫りにしている。ここで発揮される優れた言語感覚は、おそらく『日本国語大辞典』の元編集長という著者の経歴にあるのだろう。

ある表現が本来の表現であると言うことは必ずしも難しくない。しかし、本来の表現だけが正解であるとは限らない。著者はこうしたコロケーションの問題の難しさに正面から向き合い、読者自身が判断するための考え方を提示してくれている。（投稿・らすく）

（二八七頁　税込一六二〇円　2月刊）

どんなことが起こっても これだけは本当だ、ということ。
――幕末・戦後・現在
加藤典洋著　岩波ブックレット



ツイッターで自分の思ったことを述べたところ、「お前の中ではな」や「矛盾発見！はい論破！」と返され、ショックを受けた方も多いのではないだろうか。だが「自分はこう思う」という考えや、矛盾を孕んだ考えは、それだけで価値のないものなのだろうか。

著者の加藤典洋は、「とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思う」ことを考えることの足場としつつ思索と評論活動を展開してきた。その著者が、吉本隆明の戦争体験に根差した「それでは戦争などの大きな力に抗えないのでダメだ」という批判を受け、自身の学生運動時の「いい加減さ」や、尊王攘夷思想などを参照し、前述の「考えることの足場」を保持しつつも、柔軟性と普遍性を持った「二階建て構造」の思想を提起したのが本書である。

「二階建て構造」の思想の例として筆者は日本の平和思想を挙げる。その根底には論理的な矛盾、「いい加減さ」と、「とにかく戦争はいやだ」という、弱者の感覚だからこそ普遍性を持ちうる一階部分が存在し、二階部分には革新派が論理立てた戦後民主主義が存在するという。そして一階部分が矛盾していても、弱さに根差した普遍性を有する場合、二階部分は大胆に変わり得るという。著者は、途中で考えが変わることを「変態力」として肯定し、弱さゆえの普遍性を持った思想を追究する。本書は、ツイッターでの議論に疲れた方、紋切り型の「正しさ」に違和感を持つ方に好個の一冊である。（投稿・行人）

（七二頁　税込六二六円　5月刊）

漢倭奴国王から日本国天皇へ

冨谷至著
臨川書店

白鳥庫吉と内藤湖南の手で近代の邪馬台国論争が切り開かれたのはよく知られるが、一部を除いて中国学からみた古代日本の研究は流行とは言い難い。出土資料も増えている今、倭人伝などの取り扱いに優れた中国史家の「日本史」への再参戦が強く望まれる。

本書『漢倭奴国王から日本国天皇へ』は人文研名誉教授の冨谷至による中国史料からみた古代日本史である。古代日本史を一般書体裁で中国学者が扱うのはそれだけでも興味がわくが本書を類書と分かつのは別の点にある。

それは本書が二期に時期区分しつつ、「倭国」の中国史書での登場から大宝律令制定に至るまで「中国から見た倭国（日本）」の通史を描いたことである。邪馬台国位置論などの特定テーマ志向ではない本書により、倭国が中国と国交を持たない六世紀の意味を探る（第六章疎遠の六世紀）などの長い時間幅での議論が可能になった。「漢倭奴国王」の「切り方」に一節を割き、倭王武の上奏文の典拠を約三〇点指摘する著者の粘っこい史料解釈は、大学受験で出るような有名史料からも挑戦的な歴史叙述ができることを教えてくれる。日中韓の出土資料に通じた著者の禰軍墓誌をはじめとした出土資料の紹介と解釈も楽しい。

章の扉の日本史教科書の引用をもう少し活用したらよかった気もするが、有名史料でも手を抜かない細やかな解釈は十二分に「教育的」ではある。日本史や考古学などからの応答も心待ちにしたい。（投稿・とうこ）

（二三四頁　税込三二四〇円　4月刊）

近代天皇制から象徴天皇制へ
――「象徴」への道程

河西秀哉著
吉田書店

日本各地を訪問し、人々の傍に寄り添う人格者――今日、天皇に対してこのような印象を抱く人は少なくないだろう。それでは、こうした天皇像はいつ生まれたのか。やはり象徴天皇制が成立した敗戦後のことであろうか。この問いに対して、それが既に戦前から準備されていたと主張するのが本書である。

大正期の日本では、無政府主義など「過激思想」から天皇制を防衛すべく、天皇制が「デモクラシー」に適合するよう再編され、マスコミでは「民主的」な皇室像が喧伝された。こうした思潮の中、天皇と民衆との歴史的な繋がりや、天皇の「人格」や「道徳」を強調する議論が生まれたと著者は指摘する。

本書の眼目は、大正期の天皇論が単に戦中の「断絶」を経て戦後に「復活」したのではなく、天皇が神格化された戦中にもこれが通底すると捉える点であろう。つまり戦中期には、天皇の「仁慈」や民衆との結びつきを宣伝することで、国民の主体的な戦争協力が要求されたのである。また知識人の一部は、「人格」的な天皇が国内の多様な人間集団の政治的エネルギーを統一するという、「象徴」的な役割を天皇に期待した。著者によれば、こうした議論の上に、敗戦後の象徴天皇制や天皇の戦争責任論が成立するのである。

歴史学の魅力の一つは、現代の社会や制度が形成された過程を考察できる点にあろう。天皇の退位を来年に控えた今、私達は過去を顧みることで、天皇制に対していかなる未来を構想できるだろうか。（投稿・きつ）

（二四六頁　税込二三七六円　2月刊）

動物学者が死ぬほど向き合った「死」の話
――生き物たちの終末と進化の科学
ジュールズ・ハワード著　中山宥訳
フィルムアート社

身近な人が亡くなったとき、大事にしていたペットが死んだとき。僕たちは同じように悲しむ。死んだものは二度と動くことはなく、与えてくれた喜びも、二度と戻ることがないからだ。逆に、ペットと一緒に暮らしている人であれば、もし自分が死んだとき、愛犬や愛猫は悲しんでくれるかしらと考えてしまうものではないだろうか。

生物にとって死とはなんなのかを、昆虫からチーターまで幅広い種を対象にしたエッセイを通して考えたのが本書だ。著者はいわゆる動物学者ではなく文筆家だが、その分だけ考え方は自由でそれぞれの生物の生態の描写も丁寧であり、面白く読める。腐乱する豚を研究の対象とした法医学研究室に見学に行く章などは、広く生物の死に関するを取り扱うというテーマを掲げた本書の面目躍如だろう。

残念なことに「動物は死を悼むか」「不死の生命は実現可能か」という二大問題への応答にはあまり期待しないほうが良いかもしれない。もちろん、本文中にもあるとおり答えを出すことが不可能に近い問いであり、それに対して安易な動物愛護的回答をしない点には、エッセイでありながらしっかりとした立場に自らを置こうとする著者の良心が表れているといっていいはずだ。

論文と実証研究に依拠しないこともあり、関係する書籍のガイドとして役立てることもできそう（その点では参考文献表がほしい）。死と生物への関心を深める一冊目の読書としておすすめできる内容だ。

（三五三頁　税込二二六八円　4月刊）　（トロ）

チューリングの考えるキカイ
～人工知能の父に学ぶコンピュータ・サイエンスの基礎
阿部彩芽、笠井琢美著　技術評論社

現代の人間にとってコンピュータは必需品であり、その恩恵なくして生活を送ることはほとんど不可能である。しかし、それがどのような機械なのかと問われて、うまく答えられる人は決して多くないはずだ。

コンピュータとは何かという問いの答えを知るための第一歩として本書は好適の一冊である。内容はいわゆるコンピュータ・サイエンスの初歩的な解説であるが、全体を通じて非常にイラストが多く、解説も丁寧であるため気軽に読める点で優れている。まず、数学でよく用いられる論法の紹介から始まり、そして「計算」のモデルを導入する。このように書くと難しいようにも思えるが、実際には足し算と引き算、条件分岐以上のものは出てこない。その上で、このモデルに対する「プログラム」を理論的に考察し、その限界を明らかにすることが本書の山場である。驚くべきことに、コンピュータは「何でもできる」機械ではないということが証明できるのだ。このことは有名であるが、その証明を知っている人はあまり多くないのではないだろうか。タイトルに反して決して大きな扱いではないが、もちろんチューリングマシンも紹介される。他にも、集合論に関する議論など、興味深い話題が多数紹介されている。

総じて数式が苦手な人でも楽しんで読めるように配慮されているため、だれでも読んで理解できるはずである。コンピュータに興味のある人はもちろん、そうでない人も読んで得るところのある一冊だ。

（二四〇頁　税込二四六二円　4月刊）　（蕨餅）

アメリカのユートピア
二重権力と国民皆兵制
フレドリック・ジェイムソン他著　スラヴォイ・ジジェク編
田尻芳樹、小澤央訳　書肆心水

革命的共産主義と社会民主主義の両者がともに破産したようにもみえる現代社会にあって、マルクス主義文芸批評家として名高いフレドリック・ジェイムソンが資本主義から抜け出る第三の道として提起するのは、二重権力としての国民皆兵制――あえて左翼的に表現すれば「人民総武装」――である。

ロシア革命期における臨時政府に対するソヴィエトのように、公的な代表制政府と共存し、それと代替しうる革命的な二重権力。その役割を担う組織として軍隊が挙げられるのは、ひとつには医療保障という現実的な視点である。軍隊の私有化という時代の趨勢に抗し、再国営化を遂げた軍隊は外国での戦争が不可能になる代わりに、国営無償化された医療や教育を担うことが期待される。この新たな軍隊は実際には社会＝経済構造であるから、来たるべき権力の移行とは国家、ひいては政治そのものの衰滅を意味する。

このようにジェイムソンの（非）政治的プログラムは同時にユートピア的ヴィジョンである。ここまでの提言だけでも十分に挑発的だが、国民皆兵制下における土台と上部構造の関係の大胆な文化革命を説く後半部も前半部に劣らず刺激的である。

書名にあるようにジェイムソンの議論は連邦制への考察を含むなど、アメリカを主眼としたものだが、日本でも重く受けとめられるべきであろう。日本において国民皆兵を主張している左翼、たとえば絓秀実の所論などとの併読を薦めたい。

（霊人）

（三八四頁　税込三七八〇円　4月刊）

国家の神話
エルンスト・カッシーラー著
宮田光雄訳
講談社学術文庫

私たちは統一的な価値観が失われ、様々な価値が衝突する相対主義的な現実を生きている。「ポスト真実」という言葉が流行するのはその証左であるが、こうした事態は歴史的に遡れば何もここ数年で始まったわけではない。今から一世紀前のドイツでは、それまでの政治体制や宗教体系には拠り所を見出すことができなかった不安な人々が新たな神話を希求した。ナチ党が「二〇世紀の神話」を自らのキャッチフレーズに採用したのは、彼らをマーケティングの対象としたからである。

二〇世紀最大の哲学史家であるE・カッシーラーは晩年、このような性急な時代を背景に、単なるジャーナリスティックな時評ではなく、むしろ広大な人類史の中で神話が果たしてきた役割を論じようとした。しかし、ユダヤ人という自らの出自を理由に亡命を余儀なくされた彼は、この仕事を異国の地で苦難の中始めることになる。そうしたまさに闘いの軌跡が本書『**国家の神話**』なのだ。

カッシーラーはこの中で神話を単なる野蛮の残滓ではなく、人間の情動が表現されシンボルの形式をとったものと定義する。つまり神話は人間の共同存在にとって不可欠な一種のメタ言説なのだ。こうした視座に立つとき、ナチスの狂気は単なる歴史の例外的事例ではなく、文明史的課題であることが示唆される。私たちはやはり不可避的に自分たちの統合の契機をある仮象に見出してしまうのか。その限りで彼の暴き出した神話の構造は検討され続ける価値がある。

（投稿・NN）

（六二四頁　税込一九七六円　2月刊）

非正規・単身・アラフォー女性
――「失われた世代」の絶望と希望
雨宮処凛著　光文社新書

高齢化や孤独死の問題が取りざたされる昨今、多くの人々が、親の介護や、年老いた時の自らの身の処し方に思いをはせることがあるはずだ。本書では、就職氷河期時代に様々な理由から非正規職につき、現在の孤独と未来への不安を抱えたアラフォー女性たちの素顔を垣間見ることができる。

なんとか生きていくためのお金を稼ぎ出すため、非正規の劣悪な環境でも必死に働いてきた彼女たちは、がむしゃらに生き抜いた時代を経て、さらなる不安に晒されている。年齢が物言う婚活市場は厳しく、年取った親の介護などの問題にさらされても、同じように窮屈な立場に置かれている友人たちへは、なかなか助けを求められないのだ。

「ババアのシェアハウスみたいの、つくりましょうよ」。彼女たちの盛り上がる話題の一つであるらしい「ババア互助会」に、彼女たちの思いが多分に包含されている。辛さを感じながらも、その渦中で今も戦っている女性たちの姿を、個人への取材によってうまく顕在化させた一冊だ。（トロ）

（二八四頁　税込九九三円　3月刊）

インド哲学　10講
赤松明彦著　岩波新書

読経や礼拝などの宗教的実践をしない社会でも、宗教関係の本は売れ続けている。それは宗教を行為としてではなく、哲学として享受したいという願望の表れかもしれない。ならば仏教などの宗教が生まれる下地を作った、インド哲学についても理解を深めてはいかがだろうか。ヒンドゥー教・ジャイナ教・シーク教といったインド哲学から派生した宗教も、本書を読めば輪郭がつかめるはずだ。

本書ではインド哲学の中でも存在論を中心に扱った一〇の講義をまとめている。「何故世界は存在しているのか」、「世界の始まりは何が起きたのか」という問いから認識や言語への思索へと繋がっていくのは西洋哲学にも通じる志向だ。そこで「梵我一如」や、「業」、「因果」といった馴染みの概念が用いられ考察されていく。

本書を読めば昨今流行りのマインドフルネスやヨーガもインド哲学に通じていることが分かるはずだ。気軽な気持ちで興味をもつ人にこそ、その基底に流れる哲学を理解するためにこの本を勧めたい。（きもの）

（二五六頁　税込九〇七円　3月刊）

ベラスケス
宮廷のなかの革命者
大髙保二郎著　岩波新書

ディエゴ・デ・シルバ・イ・ベラスケスが一五九九年にこの世に生を享けた時、スペインは大航海時代の勢いを失い、斜陽にさしかかっていた。マニエリスムからバロックへという芸術上の転換期も重なった。画家はこの困難な時代を引き受けて、「絵画の革命」を成し遂げた。半世紀以上ベラスケスを研究してきた著者が讃嘆の念で贈る評伝である。

王宮配室長という要職に就いてもいた彼の謎に満ちた出自。師匠やイタリア遊学の影響。ピレネー山脈の向こうの巨匠ルーベンスとの確執。離宮の絵画装飾の総合プロデュースという仕事。多くの肖像画や名高い《ラス・メニーナス》に秘められた意味……。

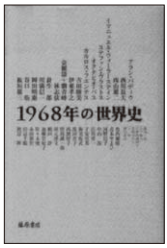
このように生涯を緻密に辿りつつ強調されるのは、諸階層の人間や日常の事物を等しく客観的に描写することを通して近代的な批判精神を獲得した「革命者」の姿なのである。

折しも、兵庫県立美術館にて《プラド美術館展――ベラスケスと絵画の栄光――》が開催中だ（一〇月一四日まで）。重厚な美への良い導きの書となることを願う。（春海）

（二八八頁　税込一〇三七円　5月刊）

1968年とは何だったのか？

半世紀前、この世界には革命があった。そんなことを言ってもあまり実感が湧かないかもしれない。フランスの五月革命を中心に公民権運動やベトナム反戦運動が驚くほど盛り上がった時代、デモと騒乱に揺れた時代。一般的にはそう言われているだろう。歴史的転換期とされる半世紀前を回顧する動きは今ちょうど高まっている。京大人文研主催のシンポジウムに参加した読者もいるかもしれない。しかし現在の世界、そして我々にあの時代は如何にして結びつくのか、そんな疑問を持ってこの回顧の動きを見たときに参照項となる本を集めてみた。



【1968年の様相】

ざっと半世紀前の雰囲気を感じたい場合に『**1968年の世界史**』（藤原書店）は面白いだろう。この時代を経験した当事者の回顧談、そしてウォーラーステイン等現在活躍する学者たちによる当時の世相の分析と現状への提言は一読に値する。自然発生的に小集団が生まれ、互いに自らの主張をぶつけ合いながら改革運動を拡散させていく、それが新しく主流となるべき運動のあり方だ。そんな考えが当時の革命運動に通底するものであったと様々な書き手の文章からは読み取れる。その思想が現在にどう受け継がれるべきかという視点に立った分析を含め、当時と現在を繋ごうとする試みが本書にはコンパクトにまとまっている。ただし、本書が出たのは今から一〇年前。この一〇年前の視点による分析が現在の状況から見た時に相応しいといえるのか、そんなことすらも考えさせてくれる一冊である。時代は確かに変化していることを見て取れるともいえる。

【日本における1968年の様相】

さて、日本における1968年はどうだったのか、これを知るに際しては、最近でも絓秀実等刺激的な著者による本が何冊も出ているので知識としてはそちらを参照してほしい。ここで取り上げるのは写真である。『**東大全共闘1968～1969**』（角川ソフィア文庫）は東大紛争のバリケードの中を記録した貴重な写真集である。偶然から学生側の視点で紛争に関わることとなった撮影者は彼らと共に行動し、その内幕を記録し続けた。後になってネガを現像したことから世に出ることとなった当時の写真によって学生運動の熱気や緊迫感は明確に見る者に伝わってくるが、それゆえにかえって現在の人々の見せる様相との落差も感じられる。当時はあった運動のうねりが今は見えない。

【1968年の遺したもの】

そんな1968年は、不思議なところに影響を与えている。『**現代建築理論序説**』（鹿島出版会）ではこの時代に端を発する建築理論の変化についてまとまっている。バウハウス等二〇世紀初頭から普及した機能主義的な建築理論はこの時代に否定され、美的・記号的な面から理論を打ち立てようという運動が起こり、そこから例えば黒川紀章や磯崎新等が生まれてきた。しかし今、京都三条にある安藤忠雄設計の建物はテナントが入らずガランとしている。現代建築も魅力が褪せてきたのだろうか。

半世紀前と現在との繋がりが少ないとするならば、今年行われた回顧の動きは今だけのものに留まるのだろうか。

（ねこ）

失われた対話を求めて……

話し合うということを、理念として提示するのは容易いが、実践するのは困難を伴う。文脈を共有していない人に説明するのは苦労が多く、理解を得られないこともあれば厳しい批判にもあうからだ。しかしそうした労苦から目を背けて対話を拒絶した時、私たちは他者を否定し暴虐な人間へと堕落してしまう。もう一度、対話の場所に帰ろう。そのための本を紹介したい。

空気は対話を否定する

平田オリザ著『**わかりあえないことから**』は、日本社会が陥りがちなコミュニケーション不全について考えさせてくれる。キーワードは「ダブルバインド」だ。往々にして学校や企業では「自由」や「対話」を理念として掲げても、行動を起こした時、上からの命令で弾圧されてしまう。そこには掲げていた対話も説明もなく、空気や同調を強制されるのだ。対話を掲げながらも、対話を拒否する環境では、人は自分の意志で行動を起こせず卑屈になってしまう。意思決定が上下関係で決まる社会に、対話は生まれない。また「なんとなくわかれよ」という空気が通じてしまう社会では、対話する動機が生まれないのだ。平田オリザはこうした環境を指摘した上で、演劇による実験的な対話形成の重要性を唱える。互いが分かり合えていない関係、普段の生活から解放された演劇の関係は、対話の苦難を学んでいく場でもあり、その価値を知っていく場でもあるのだ。

何故話し合うことが重要なのか

ではなぜ対話が重要なのかを考える上で、ユルゲン・ハーバーマスの『**公共性の構造転換**』を紹介しよう。本書は研究書であり、いかめしいタイトルだが、対話が生まれる公共性という場を知るうえでやはり多くの人に読んでほしい一作だ。

本書は一七―一八世紀に誕生した「第三の身分」による喫茶店の雑談を分析した本だ。貴族でも聖職者でもない平民による彼らは、藝術が一般の人に開かれていく社会の中で、その批評的討論を喫茶店で行った。そうしたコミュニケーションは政治への批評に繋がっていき、時の権力を牽制し批判していく力となっていく。ハーバーマスは公共的な対話だけが、恣意的な意志を、理性的な統治に変えていけると考えている。ものごとが正しいと言えるのは権力で強制されたからではなく、批判的な討議に耐えてきたからだ。こう考えると、対話が失われていく社会とは、正しさが失われ恣意的な権力で決められてしまう社会と言えるだろう。

最後に紹介したいのは井上達夫著『**共生の作法――会話としての正義――**』だ。正義論で有名な井上は、会話ができる関係に正義の条件をみた。どういうことか。

それは話し合えるということが、互いの自由を尊重し合える関係性の証だからだ。必ずしも合意を目的とする必要はない。時にすれ違い、時に誤解も起きるだろう。それでも話し合える関係性にこそ、互いの自由を認め合いながら、互いが変わっていける可能性が宿っている。異なる人間同士が、共に生きるための作法として、私たちは話し合いを否定してはいけないのだ。

冒頭で述べた様に、話し合うことは辛い。しかし辛さに負けた時時、人は知性を捨ててしまう。もう一度対話の生まれる場所に帰ろう。その場所にこそ、自由の風が吹いているのだから。（**きもの**）

編集後記

今月号の企画では、ちょうど半世紀前の「1968 年」を振り返りました。わたしもつい先頃、友人にすすめられてベルナルド・ベルトルッチ監督の映画『ドリーマーズ』をDVD で見たところです。五月革命に湧くパリと愛し合った、双子の姉弟とひとりの男の物語です。政治と性愛の主題が絡み合い、過激なシーンも匂い立つのですが、当時の熱気を忠実に描写し、過去の名画へのオマージュもちりばめた美しい映画です。雨降りの夜に、赤い葡萄酒でも飲みながらご覧になってみてはいかがでしょうか。

あるいは、「平成」という時代も残り一年を切っているわけですが、今月号では「天皇」や「国家」を扱った本の書評が目立ちました。わたしたちとしても、いつか「平成」という題で特集を組んでみたいと考えております。読者の皆様のおすすめの本やこの時代の思い出・印象など、さまざまなご意見をお寄せいただければ幸いです。

ともあれ、良い夏を過ごされますように。ただし、皆様がどんな危険や愉楽や叡知へ旅立たれても、綴葉旅行社は一切の責任を取りかねますのでご承知おきください。　（春海）

当てよう！図書カード

今月号の「旅行」特集、読んで下さってありがとうございます。さて旅行に行くなら海派ですか、山派ですか？　私は京都の山を見慣れてしまったので広い海の方に行ってみたいですね。そんな海の広さを示す言葉として「七つの海」というものがありますが、この言葉で有名なイギリスの詩人は誰でしょう？

1. ワーズワース　　2. キーツ
3. キップリング　　4. バイロン

（ねこ）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（または e-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは 8 月 15 日です。

4 月号の解答

4 月号「次の香料のうち、樹脂ではないのはどれ？」の解答は、2. 龍涎香でした。この香料は海岸で稀に拾えることでも有名です。非常に高く売れるので、一獲千金も狙えます。応募者 9 名中 9 名の方が正解でした。図書カードの当選者は、Soso さん、長老さん、なかさん、鈴さん、げんさんさん（順不同）です。おめでとうございます。　（蕨餅）

読者からひとこと

○テスト勉強が嫌になったので綴葉の表紙に色を塗って遊びました（笑）　（医・るん）

○表紙の絵がオシャレですね。とても素敵です。　（理・トトロ）

――ありがとうございます。この度、四年余りにわたってご愛顧いただいた本誌表紙絵の担当者が、編集部内外から惜しまれつつも務め終えました。今号より、新たなイラストレーターによる表紙絵をお楽しみください。

○毎回この投稿したカードがきちんと編集部に届いているのか不安です。何か確認方法はないでしょうか？　（理・深みの巡礼者）

――少なくとも「この」カードは届いております。確認方法としては、本誌表紙に記載されている綴葉のメールアドレスにご連絡くださると、担当者が確認の上返信いたします。

○伝記の特集、興味深くよみました。小学生の頃、伝記の本が大好きだったのを思い出しました。　（理・げんさん）

――ありがとうございます。確かに小学生の頃は「偉人伝」として伝記をよく読みますよね。そういえば、私はジョージ・フォアマンの自伝を愛読していました。彼の試合を見たことがなかったにもかかわらず。　（霊人）